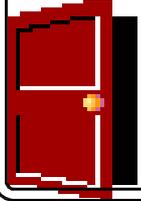


《読書活動の楽しさと大切さを伝えたくて》



読書活動への扉を開く！

桑村小学校 令和4年8月26日 文責 渡邊

さあ、夏休みが終わり、また元気な声が桑村小学校にもどってきました。貴重な体験とともに読書活動にも取り組んだ子供たち、彼らの成長がこれからの教育活動で発揮されることを期待しています。

わたしもこの夏、何冊か読書に取り組みました。今回紹介する図書は、『子どもが心配人として大事な3つの力』（養老孟司著 PHP研究所 2022年3月）です。この図書は、本校の6年生の保護者から紹介していただきました。筆者の養老孟司氏が、4人の識者と語り合うという形で論は展開されていきます。

「まえがき」には、次のように述べられています。

サブタイトルの3つの力というのは、宮口孝治先生が重視される、学びのための根本的な能力「認知機能」、高橋孝雄先生と小泉英明先生が共におっしゃった「共感する力」、高橋和也先生が自由学園の教育で目指している「自分の頭で考える人になる」ことを指す。(p4. p5)

なるほど上記の3つの力は、どれも大切な力と言えますね。

高橋孝雄氏との対談では、「日常の幸せを子どもに与えよ」というタイトルのもと、興味深いことが著されています。

◆違和感にいち早く気づくことが仕事

高橋 養老先生が先のインタビューで指摘されていたように、情報を自ら収集するのではなく、二次的な情報の「後追い」に偏重してしまう人類の現状は、私も小児科医の立場から大いに危惧しているところです。

養老 自分の五感から入ってきたものを「情報化」せずに、誰かがすでに収集した情報をこれ幸いとばかりに重宝する。こうした「情報処理」を主とするネットの世界はますます誇張し、その一方で、あろうことか農業や漁業といった一次産業が蔑ろにされている。現代の風潮はますます情報処理に偏っているように感じられ、ゆゆしき事態です。(p62)

五感を働かせる体験活動は、とても大切なことです。桑村小学校は、豊かな自然に恵まれ、保護者や地域の方々の応援のもと、いろいろな体験活動が行われています。そこでは、実際に見たり、聞いたり、嗅いだり、触れたり、味わったりしています。そう、五感をめいっぱい働かせているのです。本当にすばらしい学習環境であり、そこで学ぶ子供たちは幸せであると思います。

また、高橋氏は、実体験の減少を危惧して、次のように述べています。

高橋 もう一つ、少子化と同様に違和感を抱いているのが、インターネットの過剰利用です。先ほどの情報処理の話にも通じるテーマですが、大前提として申し上げたいのが、私はネットの存在自体を否定したいわけではないということです。

ネットはある面では間違いなく我々の生活を豊かにしているし、今日もこうしてオンラインツールを利用して、養老先生とお話しできているわけですから、それでもなお私はネットの弊害を見過ごすことはできません。

どんな弊害があるのか。大きく「無言化」「孤立化」「実体験の減少」の3点を指摘できます。なかでも、3つ目にあげた「実体験の減少」は、特に危惧すべき現象だと

思いますね。わかりやすい例がコミュニケーションです。ネットに関わっている時間が長くなると、人はどうしてもしゃべらなくなります。つまり「無言化」。また一人でいる時間が長くなります。つまり「孤立化」。そうして無意識のうちに仕事や日常から、「実体験としてのコミュニケーション」が抜け落ちていく。

それにもかかわらず「コミュニケーションがとれている」と錯覚してしまう。そこがネットの一番怖いところです。

いまや多くの方がSNSなどを介して、無数の人々とバーチャル空間でつながっています。そして、コミュニケーションがとれていると「錯覚」している。

しかし、オンライン上のコミュニケーションは対面とは異なり、五感の全てを用いているわけではありません。バーチャル空間の映像の相手に使っているのは視覚と聴覚、あとはチャットなどの場面でキーを打つときに感じる指先の触覚といったところでしょうか。

実体験としてのコミュニケーションは、脳細胞が形成するネットワークに広く五感が働きかけるものですよね？一方のネット上のコミュニケーションは、特化した感覚が脳細胞そのものを直で刺激するようなものではないか。だとしたらバーチャル空間では、人間の閾値(いきち)を超えるような強い刺激が脳細胞に伝わっていることになります。これは、生物学的にみても異常な状態で、うすら寒い心持ちすら覚えます。こうした状況を放置しておく、私たちの五感がいつしか麻痺していく気がするんです(中略)

実際に、人は死んでも生き返るのだろうと信じている子供に出会ったことがあります。それは稀な例としても、リセットボタンを押せばやり直せるゲームとは異なる現実の世界で、丁寧に人間関係をつくっていくことを面倒に思う子がいてもおかしくない。そんな子供は、現実の世界から逃げ出して、ますますゲームの世界にのめり込んでしまうでしょう。単純化されたゲームの世界に慣れすぎてしまうのは、危ういことだと思います。

ネットでは、バーチャル空間でまるで本物のような体験を得ることができても、現実世界での実体験は増えないどころか減っていくばかりです。結果的に、人間関係が五感に頼らない、または五感がスポイルされた「コミュニケーション」に埋め尽くされていくのではないかと。そこを私は一番心配しています。(p69～p72)

いかがでしょうか？五感を働かせる実体験は、いかに科学が発達しようとも大切なのですね。まだまだ紹介したいことはありますが、紙面の都合でここまでとさせていただきます。続きは、次号で紹介したいと思います。よろしくお祈いします。

読書通信『読書活動への扉を開く』を授業の再開とともに、実施していきたいと考えます。どうか皆様方のご意見、ご感想を聞かせていただきたくお祈いします。

----- 切り取り線 -----

「読書活動の扉を開く」(8月26日号)を読んだ感想

()年()